玉東町文化財調査報告　第5号

堂山遺跡

2000年

熊本県玉名郡玉東町教育委員会

玉東町文化財調査報告　第5号

堂山遺跡

2000年

熊本県玉名郡玉東町教育委員会

序　　文

玉東町(ぎょくとうまち)では、平成7年に町史を完成しましたが、その後も玉東町文化財保護委員の活動によって町内の文化財の掘り起こしが続けられています。今回の堂山(どうやま)箇所の発掘調査も、文化財保護委員からの強い要望によって実現したものです。

当地は、見るからに砦(とりで)の様な格好をしていますが、これまで景観的な推論に留まっていました。ここ数年、調査によって「遺跡か否か」の判断をしたいという希望が寄せられていましたので、今年度、玉東町教育委員会では、調査費を計上して実態解明に着手したわけです。結果として、数多くの建物跡が検出され、当地が遺跡であることが判明しました。文化財保護委員の熱意が実を結ぶ格好となり、嬉しく思います。発掘調査には、史談会総出の協力があったことを申し添えて、感謝の言葉に代えたいと思います。さらに、調査主任を勧められた森田洋介氏（日本考古学協会会員）や、一環して指導にあたられた大田幸博先生に厚くお礼を述べます。

玉東町教育委員会としましては、今後も、この様に遺跡の掘り起こしを続けて行きたいと思います。この『堂山遺跡』の報告書を、『玉東町史』の補遺編として頂きますなら、幸いに存じます。

平成12年3月31日

玉東町教育長　井　上　孝　幸

本文目次

第Ⅰ章　調査の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第1節　調査の組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第2節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第3節　玉東町の現況と立地について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第4節　玉東町の沿革・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第5節　堂山遺跡の基本的概念・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第6節　調査の手順・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　第7節　玉東町のトンカラリン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第Ⅱ章　調査結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　第1節　建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
　第2節　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

第Ⅲ章　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
第Ⅳ章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

挿図目次

第1図　熊本県玉名郡玉東町位置図　2
第2図　玉東町中心部地形図　3
第3図　大字白木周辺地形図　5
第4図　堂山遺跡周辺地形図　6
第5図　堂山遺跡調査区実測図　7
第6図　建物跡1実測図　8
第7図　建物跡2実測図　9
第8図　建物跡3実測図　9
第9図　建物跡4実測図　10
第10図　建物跡5実測図　11
第11図　建物跡6実測図　11
第12図　土坑1実測図　12
第13図　土坑2実測図　12
第14図　出土遺物実測図　13
第15図　木葉城跡周辺地形図　16
第16図　木葉城跡実測図　16
第17図　稲佐城跡周辺地形図　16
第18図　稲佐城跡実測図　16

表目次

第1表　建物跡1計測表　8
第2表　建物跡2計測表　9
第3表　建物跡3計測表　10
第4表　建物跡4計測表　10
第5表　建物跡5計測表　10
第6表　建物跡6計測表　11
第7表　出土遺物観察表　14

写真図版

図版1　堂山遺跡を北側から望む　19
図版2　堂山遺跡を南側から望む　19
図版3　調査区全景（南側から望む）　20
図版4　調査区全景（北側から望む）　20
図版5　建物跡1（南側から望む）　21
図版6　建物跡1・土坑1（北側から望む）　21
図版7　建物跡1・2（南側から望む）　22
図版8　建物跡1・3（南側から望む）　22
図版9　建物跡4・土坑2（南側から望む）　23
図版10　建物跡5（南側から望む）　23
図版11　建物跡5・6（東側から望む）　24
図版12　出土遺物　24

例　言

1. 本書は、熊本県玉名郡玉東町大字白木字堂山にある「堂山遺跡」の調査報告書である。
2. 調査は、町の自主事業として、玉東町教育委員会で行った。
3. 本報告書は、平成11年度の調査結果を収録した。
4. 発掘調査と資料整理は今年度に行った。出土遺物は、玉東町で保管している。
5. 発掘調査は、森田洋介氏(日本考古学協会員)が主任調査員を勤めた。
6. 資料整理は、石工みゆきさんと溝口真由美さんが担当した。
7. 本書の執筆は、森田氏、石工さん、溝口さん、徳永惣一(町教委)が、大田幸博氏(熊本県文化課・課長補佐)の指導を受けて行った。
8. 本書の編集は、森田氏、石工さん、溝口さん、徳永で行った。

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査の組織

調 査 主 体　玉東町教育委員会
調査責任者　井上孝幸
調査担当者　森田洋介
専門調査員　大田幸博
調査事務局　小柳俊介（事務局長）　徳永惣一（社会教育課・課長補佐）
報告書作成　森田洋介　石工みゆき　溝口真由美
測 量 補 助　永田六三子　永田健一
調査協力者　中尾秋義
発 掘 作 業　〔玉東町文化財保護委員会〕
清田之長（委員長）　狩野昭巳　児玉顕太郎　児玉　博　藤本敬三　前田重治
〔玉東町史談会〕国友猛省　坂本　直　中島敏隆　藤本一哉　星子正三　吉田誠二

第2節　調査に至る経緯

玉東町文化財保護委員会（委員長：清田之長）では、日々の活動が盛んである。町史編纂事業が平成7年に完了した後も、引き続いて、町内所在の文化財の掘り起こしが続けられている。その中で、委員の方々が、以前から非常に気にしていた箇所がある。それは、白木地区からの丘陵末端部が、北側迫地へ張り出した区画である。独立丘陵のような「長円形状の小山」で、斜面部は、削り落とされて急峻である。明らかに、人の手が加わっており、形状からして、委員の間では「中世の砦跡ではないか」とする考え方が一般的であった。以前、現地を訪れた田邊哲夫先生（元・町史編纂委員長）も同様な見方をされたという。文化財保護委員から相談を受けた町教委では、文化財活動の一環として調査費を計上した（町自主事業）。調査は、町教委が主体となって、1月から3月まで実施し（調査担当：森田洋介氏）、中世の建物跡を発見するなど大きな成果を上げた。なお、調査から報告書作成に至るまで、一環して大田幸博先生（熊本県文化課・課長補佐）から指導を受けた。玉東町史談会からも、多大な協力があった。関係各位に厚くお礼を申したい。

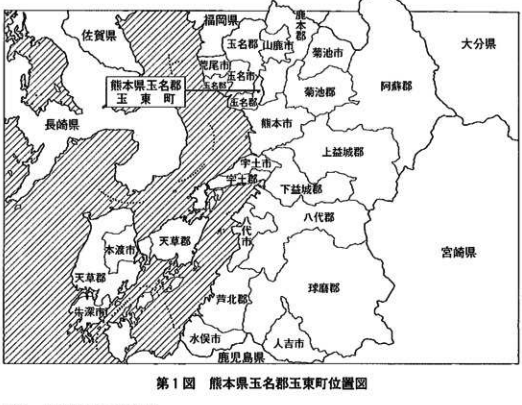
（徳永惣一）

第3節　玉東町の現況と立地について

昭和42年4月1日、玉東村に町制施行して成立。熊本県の北部、玉名郡の南東部に位置する。東西幅は約4km、南北幅は約9km、総面積24.40㎢。行政域では、北に菊水町（玉名郡）・鹿央町（鹿本郡）、東に植木町（鹿本郡）、西に玉名市・天水町（玉名郡）、南は熊本市と接する。町役場の位置は、東経130°38′、北緯32°55′。地勢は変化に富み、北部に木葉山（標高238.4m）や国見山（標高389m）を中心とした山が連なり、南側は、金峰山（一ノ岳）北側の緩斜面で境界をなす。町の中央部は、この緩斜面と木葉山が造り出す盆地状地形の中にあり、ここを、木葉川が浦田川（北部山地から）と白木川（南部丘陵地から）を合わせて西流する。町並みは、東西に広がり、木葉川流域に沿ってＪＲ九州の鹿児島本線と国道208号が並走する。主な史跡に、著名な稲佐廃寺（古代）や西安寺五輪塔群（中世）をはじめ、西南戦争関係の官軍墓地（明治）がある。

※玉東村：昭和30～42年。山北と木葉の2か村が合併して成立した。稲佐・浦田・上木葉・上白木・木葉・西安寺・白木・原倉・二俣・山口の大字を継承している。

（石工みゆき）



第１図　熊本県玉名郡玉東町位置図

第４節　玉東町の沿革

調査の結果、主に、歴史時代の遺物と遺構が検出されたので、古代から中世に限った歴史の流れを追う。

〔古　代〕玉名郡に属したと考えられる。『和名抄』に見る「下宅郷」に比定され、古代駅家のうち、坂本駅家を稲佐付近に求める考えがある。稲佐廃寺は、発掘調査の結果、平安時代の大寺院であることが判明している。当然、郡寺と考えられるが、一般的に、玉名郡寺は、立願寺が有力視されているので矛盾が生じる。この説に従えば、稲佐寺は、隣接の山本郡に属したことになる。山本郡に、郡寺と伝えられる場所が無いことも合わせて記したい。

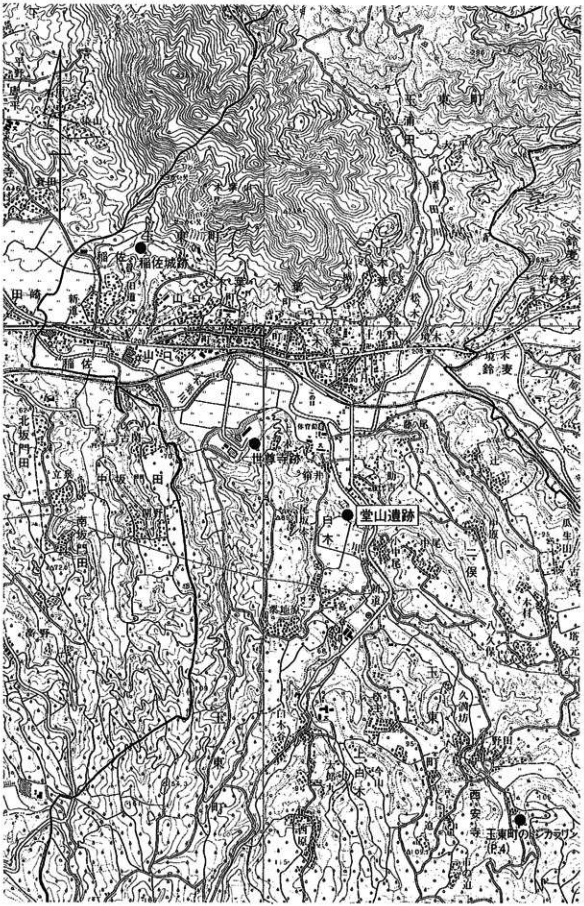
原倉には、むくろじ・金冀・西原などに製鉄所跡が残っている。官営の製鉄作業場であろう。

〔中　世〕町内と関連深い武士団に、相良氏がいる。鎌倉御家人の同氏は、頼景が鎌倉時代に球磨郡多良木に下向して以来、長頼・宗頼・頼平などの子息たちが、肥後の各地に所領を得て入部したと伝えられる。検討の余地はあるが『相良家文書』の「肥後国山北西安寺石堂碑文」によれば、当地の山北郷に所領を得たのは、三男の頼平であったという。この時代の相良氏関係の遺跡は、西安寺跡である。寺内に、伽藍配置の建物礎石と五輪塔群が残っている。同氏は後に、山北・相良氏となって、菊池氏の家臣となり、菊池則隆の時代まで活躍した。その他、中世後期の有力土豪に、宇都宮氏と小森田氏がいる。

（溝口真由美）

第５節　堂山遺跡の基本的概念

景観的に、砦跡ではないかと考えられる区域である。一般的に、中世城跡調査では、①城跡地としての伝承が残る。②「城山」などの城関係の地名が残る。③はっきりと分かる城跡の遺構が残る。この3点セットが大原則となる。一般的に、①・②の存在があり、これが結果として③へと繋がっている。したがって、①・②が欠落し、いきなり③という事例は極めて特異である。調査者が知る限りでは、球磨郡錦町の火縄城跡（調査時に、地名から城名を命名）ぐらいに事例が留まる。この城跡は、



第２図　玉東町中心部地形図

採土工事の際に発見されたもので、堀切などのはっきりとした遺構に加え、発掘調査の結果、城跡に関係する数多くの遺物が出土した。正直な所、中世城跡を調査する場合、地形からのアプローチを多様すれば、収拾がつかない。調査の基本は、対象地が城跡とされることが第一条件で、そこから踏査が始まる。結果として、城跡地において「独立区画、削平地、土塁、堀切、小段など」を確認し、大縮尺による測量調査を行い、次に発掘調査という手順になる。

この意味からすれば、堂山調査は、かなり冒険的な試みであった。見た目には、砦に似ているが、遺跡地図にも掲載されていない場所で、伝承も無く、単なる推定地に過ぎなかった。調査の結果、幸いなことに複数の建物跡が検出され、中世遺物も出土した。堂山は、確かに砦のような遺跡であったことが判明したのである。

（森田洋介）

第6節　調査の手順

堂山の上面は、平坦地（地目：畑地）であった。ここ数年、耕作されていなかったので、表土は、固く引き締まった状態にあった。当初、5m四方のトレンチを二箇所に設定し、史談会員が中心となって、手作業で、表土剥ぎを行った。表土は厚さ20cm足らずで、これを除去すると、直ぐにローム土の地山が表れた。精査を行うと、複数の柱穴が検出され、糸切り土師皿などの中世遺物も出土したので、関係者の喜びは、ひとしおであった。この時点で、初期の調査目的は達成された。そこで、今後の取り組みについて話し合った所、「堂山解明のためには、全掘も辞さない」との強い決意が委員の間でなされた。しかし、調査費と期間の問題があり、打開策を検討していた所、藤本会員から「小型のバック・フォーを所持しているので、作業に提供したい」との申し入れがあり、事柄は、一気に進展した。

結果として、全掘に近い状態になり、堂山の全容を解明することが出来た。休日を利用しての調査であったが、幸いに天候にも恵まれて、有意義な調査を行うことが出来た。

（森田洋介）

第7節　玉東町のトンカラリン

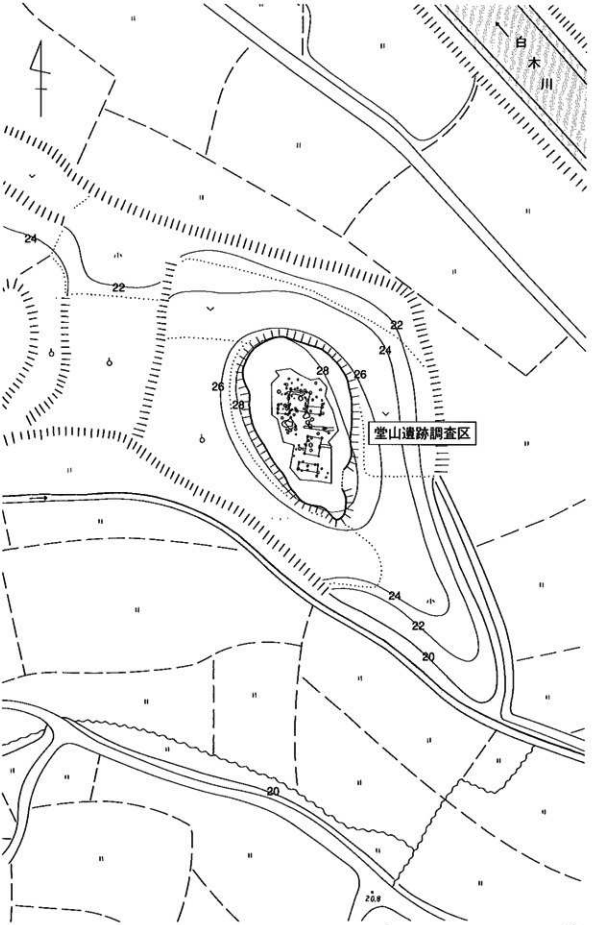
調査の途中で、調査担当者に、狩野昭巳委員から、玉東町西安寺地区に不思議な石組み遺構があるとの情報がもたらされた。早速、現地へ赴くと、山裾の孟宗竹山に「いわくら」状の大石と切り石が組み合った隧穴遺構であることが判明した。内部に7段からなる石段があり、菊水町のトンカラリンに酷似していた。マスコミ等にも大きく報道され、堂山調査は、思わぬ副産物をもたらした。この玉東町のトンカラリンについては、今後調査を行う計画を立てている。

（徳永惣一）

玉東町のトンカラリン（石組み隧穴遺構）

菊水町のトンカラリン
（石組み暗渠）

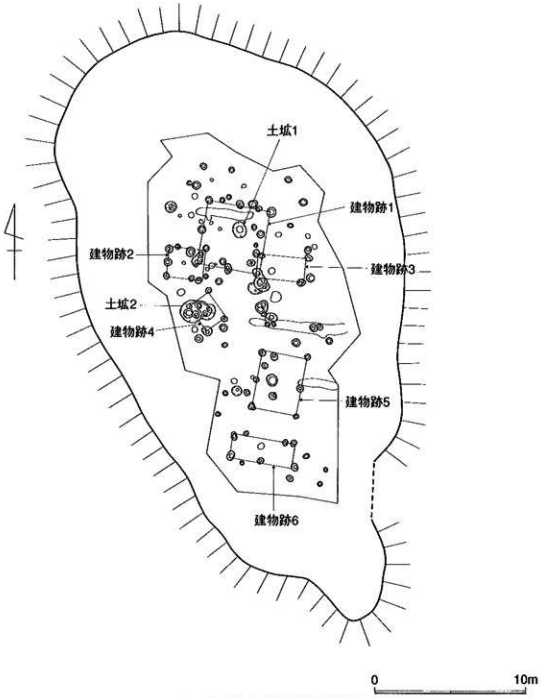
第3図　大字白木周辺地形図



第4図　堂山遺跡周辺地形図

第II章　調査結果

ローム土から検出された穴は、いずれも深く掘り込まれているのが特色で、考古学的にいう柱穴に相応しいものであった。現場で、建物の復元を試みると計6棟（建物跡1～6）が綺麗に立ち上がった。柱筋は、建物4を除くと東西方向で統一された感があり、規則性が感じられた。ただし、時期的には差異があり、建物1と建物2・3が切り合い関係にあった。この3棟に限っては、建物1が当初のもので、建物2・3が、同時期の再築と推定される。このことから、その他の建物との関係は、2つのパターン（建物1・5・6と建物2・3・5・6の二時期）が考えられる。その際、建物4は、柱筋からずれているために、対象外となる。

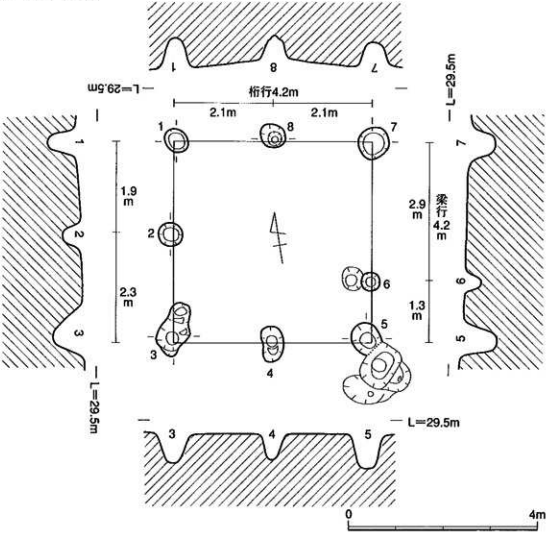


第５図　堂山遺跡調査区実測図

第１節　建物跡

建物跡1

平場の北側中央部から検出されたもので、梁行・桁行共に、長さ4.2mの正方形建物。推定床面積は、約17.6m²。側柱タイプのもので、柱間は、南北両側に限って、2.1mの均等割り。東側は1.3m＋2.9m、西側は2.3m＋1.9m。8個の柱穴は、いずれも柱筋が通っている。南東側の隅柱が、建物3と切り合い関係にある。



第６図　建物跡１実測図

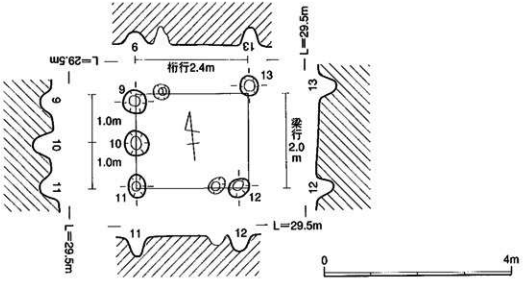
（単位：cm）

No.	柱穴 長径	柱穴 短径	底径 長径	底径 短径	深さ	備考
1	55	45	—	—	61	円形状。
2	52	50	35	30	36	円形状
3	—	57	27	25	65	歪な形状。2つの柱穴の切り合い。
4	(75)	45	25	25	52	歪な長円形状。
5	(70)	60	35	30	67	4つの柱穴と切り合う。建物3のNo.15と重複。
6	42	40	23	20	33	円形状。柱穴と隣接する。
7	70	65	—	—	55	円形状。
8	55	50	30	28	47	やや円形状。柱痕が残る。

第１表　建物跡１計測表

建物跡2

平場の北西側から検出されたもので、梁行2.0m、桁行2.4m。推定床面積は、約4.8㎡。柱間は、西側梁行に間柱があって、1.0mの均等割り。5個の柱穴は東側梁行と北側桁行で、千鳥足の並びとなる。



第7図　建物跡2実測図

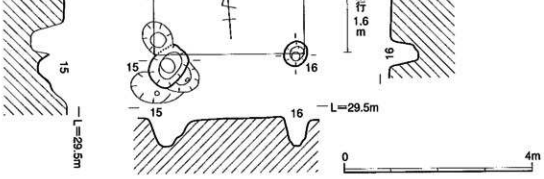
〔単位：cm〕

No.	柱穴 長径	柱穴 短径	底径 長径	底径 短径	深さ	備考
9	52	50	23	23	31	円形状。柱穴が隣接する。
10	55	50	30	23	36	円形状
11	52	38	20	18	40	やや長円形状。
12	50	36	25	17	32	やや長円形状。柱穴が隣接する。
13	43	40	25	20	36	円形状。

第2表　建物跡2計測表

建物跡3

平場の北東側から検出されたもので、梁行1.6m、桁行3.2m。推定床面積は、約5.1㎡。間柱は無い。北側桁行を除き、千鳥足の並びとなる。



第8図　建物跡3実測図

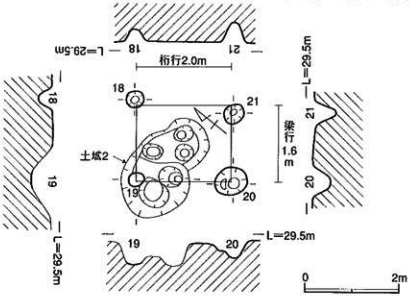
〔単位:cm〕

No.	柱穴		底径		深さ	備考
	長径	短径	長径	短径		
14	53	45	23	23	24	やや円形状。柱穴が隣接する。
15	(60)	60	33	30	76	4つの柱穴と切り合う。建物1のNo.5と重複。
16	55	48	32	28	59	円形状。柱痕が残る。
17	48	45	28	25	41	円形状。

第3表　建物跡3計測表

建物跡4

平場の中央部・西側から検出されたもので、梁行1.6m、桁行2.0m。推定床面積は、約3.2㎡。間柱は無い。北側桁行は、千鳥足の並びとなる。南西側の隅柱穴は、上面から土坑が切り込んでいる。



第9図　建物跡4実測図

〔単位:cm〕

No.	柱穴		底径		深さ	備考
	長径	短径	長径	短径		
18	36	35	18	15	26	円形状。
19	—	—	35	28	46	土坑、柱穴と切り合う。
20	70	60	25	23	35	やや円形状。
21	45	38	15	12	41	やや円形状。

第4表　建物跡4計測表

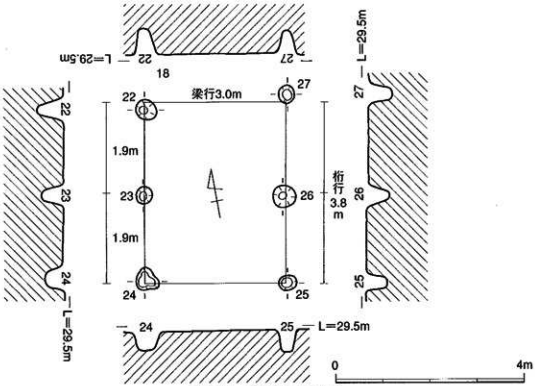
建物跡5

平場の南側・中央部から検出されたもので、梁行3.0m、桁行3.8m。東西の桁行に間柱が入るため、梁行1間×桁行2間の構造となる。桁行の柱間は1.9mの均等割り。推定床面積は、約11.4㎡。この建物は、梁行と桁行の向きが、他と比べて逆になっている。

〔単位:cm〕

No.	柱穴		底径		深さ	備考
	長径	短径	長径	短径		
22	45	40	18	18	55	やや円形状。
23	38	33	20	15	44	円形状
24	50	45	35	30	40	歪な三角形状。
25	40	32	25	22	45	やや長円形状。
26	50	45	17	15	45	やや円形状。
27	40	35	23	20	50	円形状。

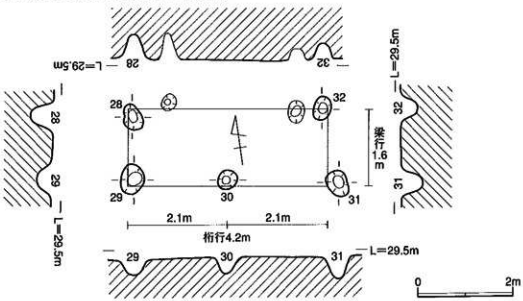
第5表　建物跡5計測表



第10図　建物跡5実測図

建物跡6

平場の南側から検出されたもので、梁行1.6m、桁行4.2m。南側の桁行に間柱が入る。桁行の柱間は2.1mの均等割り。推定床面積は、約6.7㎡。



第11図　建物跡6実測図

〔単位：cm〕

No.	柱穴 長径	柱穴 短径	底径 長径	底径 短径	深さ	備考
28	57	40	27	18	50	歪な柱穴。
29	65	52	35	27	28	歪な長円形状。
30	45	37	20	17	37	やや円形状。
31	55	45	27	22	46	やや歪な長円形状。
32	50	37	23	18	34	長円形状。

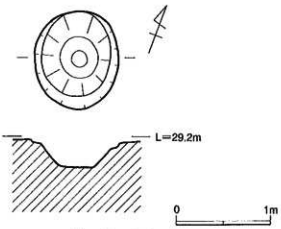
第6表　建物跡6計測表

第2節　土　坑

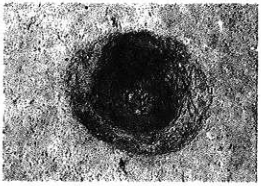
土坑1

調査区の北側寄りで検出された土坑である。大きさは、上場で長径104cm、短径88cm。底部で長径44cm、短径40cm。深さは27cmで、断面形は、やや皿状となる。

調査区には、以前、五輪塔等の石造物があったとのことで（地権者の示唆）、当初は、墓穴を意識して掘り進めたが、深さは30cm未満に止まり、疑問を残した。遺物の出土は無かった。建物に関連した土坑かも知れない。



第12図　土坑1実測図

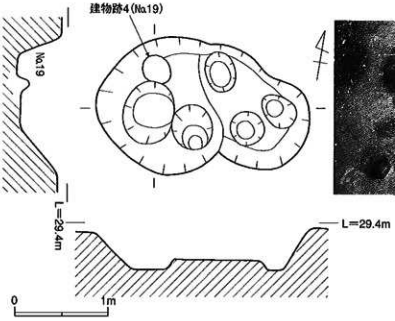


土坑1

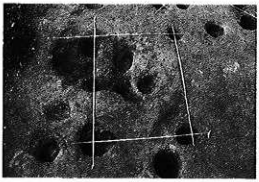
土坑2

調査区の中央部、西側寄りで検出された。歪な楕円形で、状況からすれば、二つの土坑が切り合っているのである。ただし、埋土色から二つを区分することはできなかった。

土坑の大きさは、長径230cm、短径は東側で100cm、西側で144cm。埋土に炭化物が混じることから、竪穴的な遺構と考えたが、確定するには至らなかった。底部から5個の柱穴が検出された。したがって、時期的には、建物が撤去されてからのものである。



第13図　土坑2実測図



土坑2と建物跡4

（森田洋介）

第Ⅲ章　出土遺物

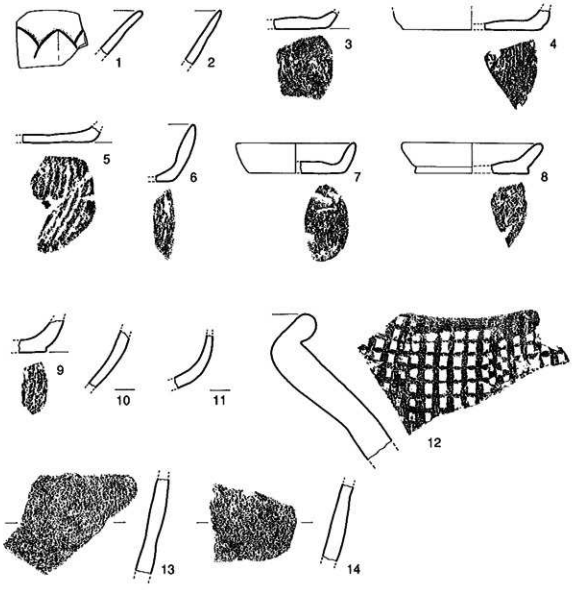
柱穴の掘り込みが、いずれも深いことから、当時の表土は、さ程、厚くなかったことが分かる。これは、後世に遺物包含層が大幅に削り取られたり、流出した状況に無いことも意味している。しかし、総じて、出土遺物は少なく、例え、そうであっても、細片のものが多かった。実測に値するのは、僅か14点に限られた。

1は、鎌倉時代後半から南北朝時代の青磁。外器面に、削り出しによる鎬蓮弁模様を見る。柱穴から出土したもので、建物跡の年代を推定する際に参考とすべき遺物である。

2～9は、糸切り土師器の皿（3～5・7～9）と杯（2・6）で、良質な胎土が使用されている。皿が多く、灯火具の類と考えられる。10・11は、破片であるが、小型の土師壺と考えられる。

12は、須恵器の甕である。体部は肉太で、外器面に格子の叩きが入る。水甕の類であろう。

13・14は、縄文晩期の土器である。この時期の遺構が検出されなかったので、他の地域からの持ち込みと判断する。



第14図　出土遺物実測図

No.	器種	器厚	形態	調整・文様	備考
1	青磁 (碗) 13C～ 14C中葉	口縁部 3mm 体部上位 4mm 下位 5mm	端反り碗。	〔外器面〕削り出しによる鎬蓮弁文様。 〔内外器面〕細かい貫入。	〔窯〕中国・竜泉窯系 〔釉色〕灰黄オリーブ色 〔焼成〕良好 〔出土〕柱穴
2	土師器 (杯)	体部上位 3mm 中位 4mm 下位 5mm	体部は薄肉で、直線的に伸びる。口縁直口。	ロクロ成型。	〔胎土〕精良(細砂の雲母が混じる) 〔色調〕暗橙色 〔焼成〕良好
3	土師器 (皿)	体部下位 5mm 底部中央 6mm 端部 6mm	平底。	ロクロ成型。 わずかに糸切り離し痕が残る。	〔胎土〕精良 〔色調〕外:濃橙色 内:橙色 〔焼成〕良好 〔出土〕柱穴
4	土師器 (皿)	体部下位 7mm 底部中央 4mm 端部 5mm	復元底径 7.3cm 平底。 外底端と体部の立ち上がりは肥厚。	ロクロ成型。 糸切り離し痕が残る。	〔胎土〕精良 〔色調〕乳白橙色 〔焼成〕良好 〔出土〕柱穴
5	土師器 (皿)	体部下位 6mm 底部中央 4mm 端部 5mm	平底。 外底端は肥厚。 内底面の中央に指頭圧痕。	ロクロ成型。 1.5mm幅の糸切り離し痕。	〔胎土〕精良(細砂の雲母が混じる) 〔色調〕暗橙色 〔焼成〕良好 〔出土〕柱穴
6	土師器 (杯)	口縁部 2mm 体部上位 5mm 中位 7mm 下位 5mm 底部 5mm	器高 3.0cm 体部は中位で肥厚。 内器面の立ち上がりで窪む。	ロクロ成型。 糸切り離し痕が残る。	〔胎土〕白色粒、細粒の雲母が混じる 〔色調〕暗橙色 〔焼成〕良好
7	土師器 (皿)	口縁部 3mm 体部中位 6mm 底部中央 6mm 端部 6mm	復元口径 6.5cm 復元底径 5.1cm 器高 1.6cm 外底端は丸味を帯びる。	板目圧痕。	〔胎土〕精良 〔色調〕明橙色 〔焼成〕良好
8	土師器 (皿)	口縁部 6mm 体部中位 7mm 底部中央 6mm 端部 7mm	復元口径 7.6cm 復元底径 6.1cm 器高 1.6cm 外底端で一旦、窪む。	ロクロ成型。	〔胎土〕精良(細砂の雲母が混じる) 〔色調〕灰橙色 〔焼成〕良好
9	土師器 (皿)	体部下位 7mm 底部中央 7mm 端部 8mm	外底端で一旦、窪む。 底部、体部とも肥厚。	ロクロ成型。 糸切り離し痕。	〔胎土〕やや粗い 〔色調〕灰白色 〔焼成〕堅緻(二次焼成で、内器面は橄色)
10	土師器 (壺)	体部上位 5mm 中位 5mm 下位 6mm	小型の土師壺。	滑らかな器面。	〔胎土〕精良 〔色調〕明白褐色 〔焼成〕良好
11	土師器 (壺)	体部上位 4mm 中位 5mm 下位 6mm	小型の土師壺。	――――	〔胎土〕やや粗い 〔色調〕橙色 〔焼成〕良好
12	須恵器 (甕)	口縁部 12mm 体部上位 19mm 中位 17mm 下位 16mm	口縁部は「く」の字に折り返されている。	〔内外器面〕丁寧なナデ。 〔外器面〕 ナデの後、格子目叩き。	〔胎土〕精良 〔色調〕黒灰色 〔焼成〕良好
13	縄文土器 (晩期)	体部上位 7mm 中位 6mm 下位 8mm	中位で一旦、窪む。	――――	〔胎土〕粗い(石英粒が混じる) 〔色調〕内:黒褐色 外:肌褐色 〔焼成〕良好
14	縄文土器 (晩期)	体部上位 6mm 中位 8mm 下位 8mm	――――	――――	〔胎土〕粗い(石英粒が混じる) 〔色調〕内:明褐色 外:黒褐色 〔焼成〕良好

第7表　出土遺物観察表

(石工みゆき)

(溝口真由美)

第Ⅳ章　ま　と　め

①かなり冒険的な試みであったが、複数の建物跡を検出できたことは、幸いであった。遺跡の年代については、短絡的すぎるかも知れないが、柱穴の底部から出土した青磁片から、中世早期のものと推定する。外器面には鎬蓮弁模様が、くっきりと削り出されており、時期幅は、鎌倉時代後半から南北朝時代に納まる。染付けが出土しない城跡は、早期のものという見解にも沿っている。青磁片以外の陶磁器は、全く出土しなかった。この時期に見合う確かな出土遺物は、小型の土師壺である。

遺跡の性格は、立地条件から簡易的な砦跡と考えてよい。山北の白木地区からは、北側の入り口にあたり、最前線基地の役目を果たす。勿論、戦いは、周辺の迫地で行われたが、有事の際に陣地となったのであろう。小規模であるが、武将間の小競り合い程度であったら、十分に用をなした小丘である。時期は、大きく下るが「肥後の国衆一揆」の際に、田中城（玉名郡三加和町）を、ぐるりと取り囲んだ豊臣勢の各陣地の中心部は、堂山程度の規模であったと思われる。現存する「仕寄り図」から、このことが伺われる。

建物は、陣地における象徴的なものであったと推定される。規模からして、堅志田城跡（下益城郡中央町）で検出された兵舎の類では無い。本来は、兵士の「詰め所」であるが、有事の際に「司令部棟なもの」へ転用されたものと思われる。柱穴の大きさと深さから、臨時的な、その場しのぎの建物でないことが分かる。建物が複数であるのは、中に、武器庫や倉庫が混じっているからであろう。建物の切り合い関係から、さ程、時間差の無い間に、２回の有事が発生したことが分かる。

ただし、遺物が少ないことから、詰め所における兵士数は少なく、使用期間も短かったことが分かる。その中で須恵器は、間違い無く水甕である。城跡では、水の備蓄が不可欠であった。

②中世の早期における武将は、大方、点の支配に留まった。したがって、この時期と推定される堂山の砦（陣地）が生きて来る。これが、面の支配となった戦国時代となると、余りに小規模すぎる所から用を成さなくなったのではないか。このことを裏付けるように、この時期まで下る遺物は、全く出土していない。

③周辺の城跡について、現状を触れておく。

※上白木地区の城跡　堂山の本体部分にあたる所で、広い丘陵地に「城山」「城林」の字名が残っている。座主集落の周辺部にあり、中世城の存在が確実視されるが、実態は、今一つ不確かである。前者は、造成されて果樹園などになっており、後者は、城跡地としての地形のまとまりが無い。それでも、集落内からは、平成３年の町道拡幅工事の際に、大きな堀状遺構が検出された。断面計測であるが幅は１０ｍを越え、深さ２.５ｍに達した。

※木葉城跡　別の名を宇都宮城とも小森田城ともいう。南北朝時代に宇都宮氏、戦国時代に小森田氏の持ち城であった。木葉・陣内地区に城跡がある。国道２０８号（旧三池往還）から北側へ少し入り込んだ所で、東隣りに役場がある。木葉山の南側端部にあたり、比高差３０ｍの小山に築かれている。今日、中心部に、有栖川宮の名を刻んだ大石碑が建っている。西南戦争関連の碑である。

平成２年に、この地が公園として再整備された時に、端部の丘頂から凝灰岩の岩盤を掘り窪めた深さ２.３ｍの空堀が検出された。丘頂を同心円状に巡るもので、これに伴う土塁の基底部も検出された。これらの遺構は完全に埋没しており、戦国時代の後半に破城された可能性が高い。ただし、この時代に見合う遺物の出土は無かった。

城跡の北側麓部を通る凹道は、「陣内坂」と呼ばれている。後世に堀切を転用したものであろう。向い側の民家からは、多くの中世土器が出土している。調査結果については『玉東町史』で詳しく報告した。

※稲佐城跡　『肥後国誌』には、稲佐地区に２ケ所の城を記している。城主不分明。内、１ケ所については、「城」地区であるが、他方は、所在地が確かでない。近くの稲佐廃寺をこれにあてる考えもあるが、はっきりしない。昭和６２・６３年度に、町教委によって学術調査が行われている。

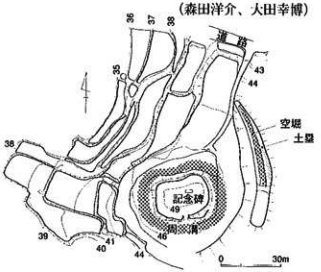
「城」地区の丘陵地か城跡地で、中心部に「城床」という地名も残っている。ここは法面が整形されて高台となっている。近くに「城山」という所もある。調査の結果、１２棟の建物跡が検出された。出土遺物は、少なかったが、同安窯の青磁が出土したことにより、城の実年代は、南北朝時代と推定される。糸切り土師皿は、ほとんど出土しなかった。

④結　語

堂山遺跡は、上白木地区の城跡を初めとして、周辺城の小森田城や稲佐城に関連した砦跡もしくは、陣地跡と考えられる。実年代については、南北朝時代に限ったものと推定される。後世に一部の区画は、墓地としても使用されている。

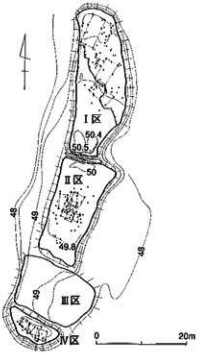
（森田洋介、大田幸博）

第 15 図　木葉城跡周辺地形図



第 16 図　木葉城跡実測図

第 17 図　稲佐城跡周辺地形図

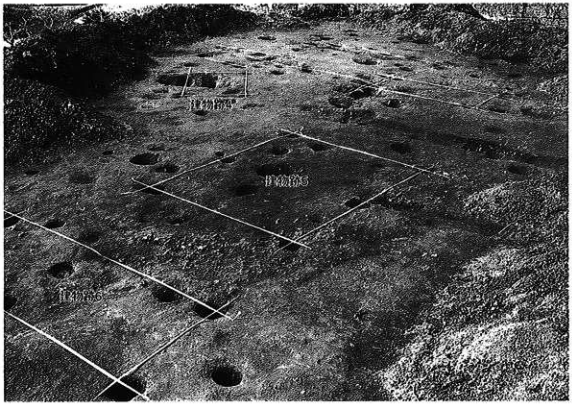


第 18 図　稲佐城跡実測図

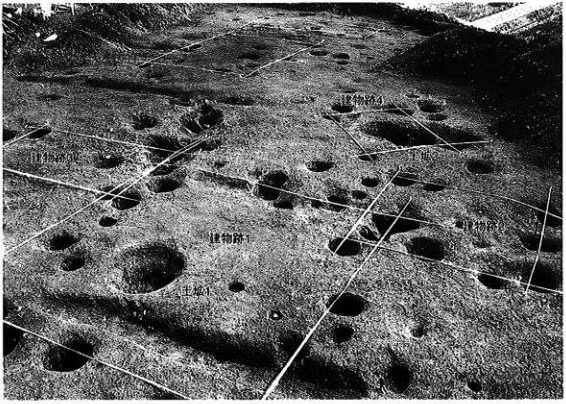
写 真 図 版

図版１　堂山遺跡を北側から望む

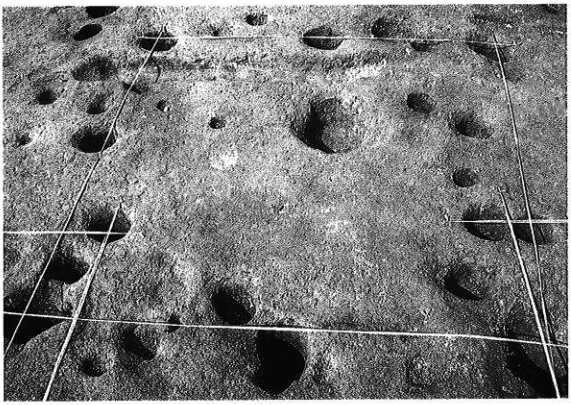
図版２　堂山遺跡を南側から望む



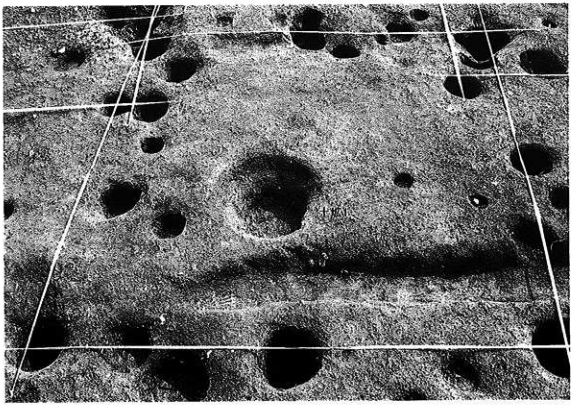
図版3　調査区全景（南側から望む）



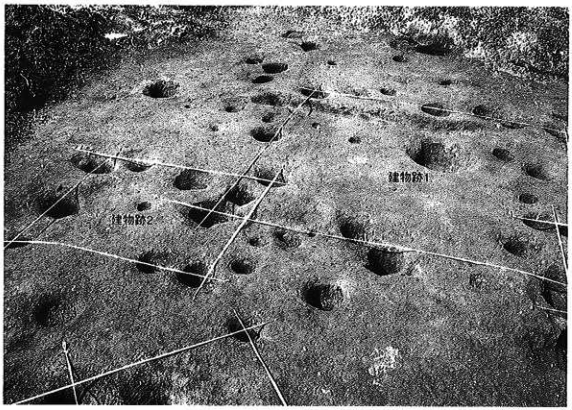
図版4　調査区全景（北側から望む）



図版５　建物跡１（南側から望む）

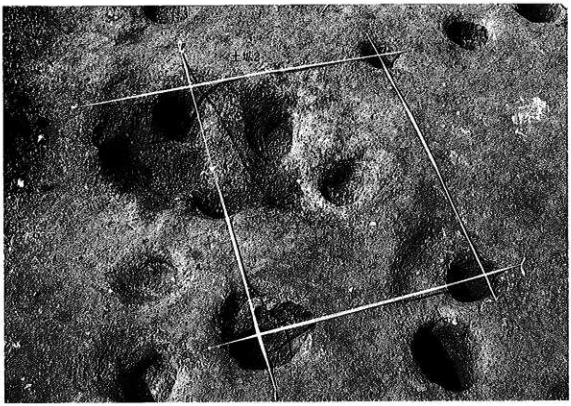


図版６　建物跡１・土坑１（北側から望む）

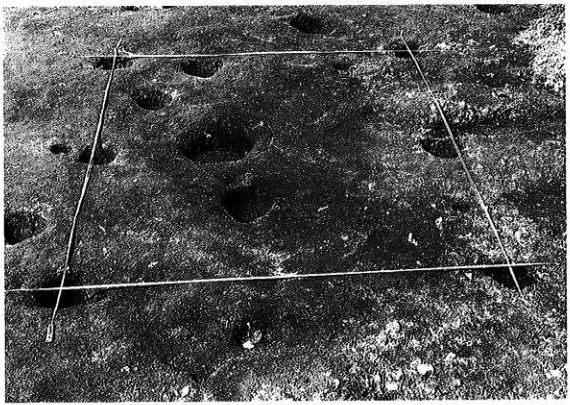


図版7　建物跡1・2（南側から望む）

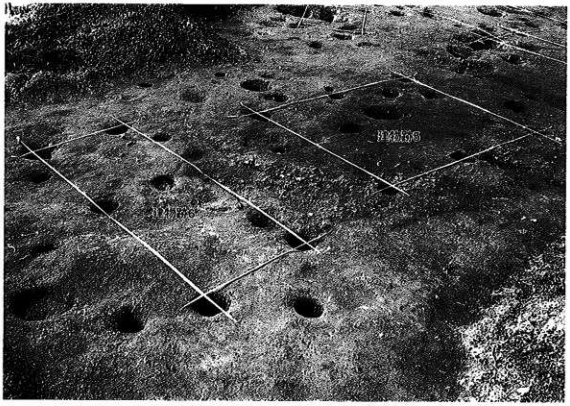
図版8　建物跡1・3（南側から望む）



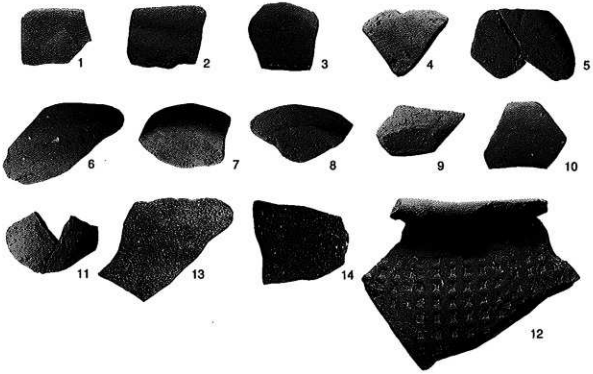
図版9　建物跡4・土坑2（南側から望む）



図版10　建物跡5（南側から望む）



図版 11　建物跡 5・6（東側から望む）



図版 12　出土遺物

報告書抄録

書　　名	堂山遺跡
シリーズ名	玉東町文化財調査報告　第5号
編著者名	森田洋介　大田幸博　徳永慧一
編集機関	玉東町教育委員会
所　在　地	熊本県玉名郡玉東町白木1－1
発行年月日	2000年 3月31日

所収遺跡名	所　在　地	調査期間	調査面積	調査原因
堂山（どうやま）遺跡	熊本県玉名郡玉東町 大字白木字堂山	2000年1月 ～3月	約230㎡	学術調査

遺跡名	主な時代	主な遺構	主な遺物
堂山遺跡	鎌倉時代 ～ 南北朝時代	・建物跡　6棟 ・柱穴 ・土坑　2基	・青磁碗　1点 (13世紀～14世紀中葉) ・土師器　10点 ・土　器　2点 ・須恵器　1点

玉東町文化財調査報告　第5号

堂　山　遺　跡

平成12年 3月31日

〔編集・発行〕
玉東町教育委員会
〒868−0312　熊本県玉名郡玉東町白木1−1
☎0968−85−3609

〔印　刷〕
㈱　トライ
〒861−0105　熊本県鹿本郡植木町味取373−1
☎096−273−2580